

# 熱中症対策で 先手打つ各社 ドライバー任せにせず



【滋賀】「ドライバーには熱中症に十分注意するよう言っているが、本人の自覚に任せている」。近畿では、梅雨明け前から例年に無い暑さに見舞われ、気温が35度を超える猛暑日を各地で観測。熱中症による死者も伝えられる中、運送会社が積極的にその対策を講じている事例は少ない。しかし、炎天下での作業はもとより、倉庫や物流施設、待機中の車内も熱中症の危険と無縁ではない。夏の繁忙期を迎え、連日奮闘するドライバーの暑さ対策について聞いた。

(小菓 史和)

炎天下での荷役作業が多いニッサル物流(早川謙一郎社長、滋賀県栗東市)では、ドライバーの休憩室にスポーツドリンクやお茶、塩分を補給する塩あめを常備し、必ず携帯するよう義務付けている。早川社長は「重量物や大型機械の輸送は、屋外で熱中症の予防には水分だけでなく、塩あめなどで塩分を補給することも大切(イメージ写真)」

長時間にわたって積み荷の上に登り、荷役やシート掛けを行うことが少なくない。水分や塩分の不足で目まいがしただけで転落事故につながる」と話す。待機中のアイドリング・ストップは常識になり、蓄

湖東物流(蘆田敏雄社長、近江八幡市)は、数年前から倉庫や物流センターの休憩室を他社のドライバーにも開放し、待機中の労働環境改善に努めている。熱中症の予防には、体内に熱をためない工夫が大切で、放熱や速乾性に優れた服装が望ましい。滋賀運送(丸山謙次社長、甲賀市)グループでは、「暑い中、奮闘するドライバーにもクールビスを」と数年前に半袖のポロシャツをベ

態をきちんと把握するとともに、熱中症の予防に二層注意しなければならぬ。毎日点呼場に立ち、ドライバーの健康状態に目を光らせる下司運送(長浜市)の下司清一社長は「7、8月は始業点呼の際に栄養ドリンク剤を一本手渡している。費用は掛かるが『健康管理に気を配ってくれている』という気持ちがドライバーに伝わり、きちんと自己管理するようになった」と語る。

給しても遅い。自覚症状が出る前に休憩を取る、水を飲むといった予防が大切」と語る。ドライバーの中には多少の疲れを感じていても、「あと少しで終わるので」「ここまで片付いたら休もう」と頑張る人も多い。作

## 木曜 レポート

冷式クーラーを装備したトラックも珍しくなくなつた。しかし、「クーラーを使用した状態で一定時間走行しないと蓄冷されないの

糖尿病、高血圧症、心臓病などの生活習慣病を持つドライバーには、体内の水分が不足すると発作を起こしたり、症状の悪化を招く危険がある。日頃から健康状

自覚症状出  
からでは遅い

NPO(非営利組織)法人ヘルスケアネットワーク(武田裕理事長)の作本貞子副理事長は「熱中症は、のどの渇きや目まい、強い疲労を感じてから水分を補

涼しい」と警鐘を鳴らす。現場で安全の力を握るのは、ドライバー一人ひとり。しかし、経営者や管理者は、全てをドライバー任せにせず、「先手を打った対策で社員の命と職場の安全を守る」という視点を持つべきだ。